

〈報告〉

サッカーにおけるチーム作りに関する一考察 —躍進するエクアドルサッカーの原点を探る—

吉井 秀邦*

A study of “Team Building” in soccer;
Exploring the roots of great progress in Ecuadorean soccer

Hidekuni YOSHII*

Key words: チーム作り, エクアドル, スポーツ人類学

1. はじめに

1.1 エクアドル代表に帯同

筆者は、2002年日韓ワールドカップ大会のFIFAワールドカップ日本組織委員会（以下JAWOCとする）より、エクアドル代表チームのチームリエゾンオフィサー（註1）を任命された。

ワールドカップ出場クラスのチームに約一か月帯同し、その内部からチーム作りを知ることは大変貴重な機会であり、是非とも価値あるその情報を今後の日本サッカーの発展のために公開したいという思いから、その「チーム作り」を文化人類学的な視点から調査し、明らかにする事を試みた。

註1) チームリエゾンオフィサー

ワールドカップにはリエゾンという制度がある。リエゾンとは、出場チームに帯同して連絡、世話役を務める渉外担当の事である。日本においてリエゾンは、国際サッカー連盟（以下FIFAとする）の下部組織でありFIFAの日本支部として機能する

JAWOCにより任命された。それぞれの出場国1チームに対し、チームリエゾンオフィサーが1人、アシスタントリエゾンが1人、メディアリエゾンが1人、セキュリティーリエゾンが警察から2人、セキュリティーリエゾンをサポートする通訳が1人の計6名がリエゾンとして帯同した。チームリエゾンオフィサーはそのリーダーとしての役割が求められた。また、韓国においても同様に、FIFAの韓国支部として機能する2002年FIFAワールドカップ韓国組織委員会（以下KOWOCとする）より、それぞれの出場国に対し5~6名がリエゾンとして任命された。

エクアドル代表チームのチームリエゾンオフィサーの主な業務は、運営側であるJAWOCと出場チームとの情報連絡役と調整役、準備キャンプ地や大会開催地の自治体と出場チームとの情報連絡役と調整役、通常の生活時における監督・選手・スタッフ達総勢約80人と日本人関係者の通訳業務から車両の手配、選手の日用品の買い出し、移動時の引率役、宿泊ホテルとの交渉業務、精算業務管理、病院の手配、携帯電話の手配、試合時の競技運営員としての役割、国内外メディアの対応、リエゾン内の役割分担調整等、非常に多岐に渡った。

* 学校法人 仙台育英学園高等学校
Sendai Ikuei Gakuen, Incorporated Sendai Ikuei
Gakuen High School

1.2 エクアドル代表チームについて

筆者が帯同したエクアドル代表チームは、2002年大会がワールドカップ初出場であり、南米予選では2002年大会で優勝したブラジルを勝ち点で「1」上回り、優勝候補であったアルゼンチンに続いて第2位という素晴らしい結果で予選を通過してきた。1930年から始まった18回のワールドカップの歴史の中で、優勝は南米地域から9回、ヨーロッパ地域から9回と2地域に属する国に絞られている。その強豪がひしめく南米地域から、エクアドルが第2位という結果で初出場を果たした事は、当時のサッカー界にとって大きな驚きとされた。

それまでの代表の主な戦績としては、ワールドカップ南米予選には1962年大会予選から出場したが、一度も予選を通過する事はできず、1966年大会予選以降は1982年大会予選を除いて、1994年までずっと予選最下位が続いていた。

しかし2002年にワールドカップに初出場を果たした後、エクアドルサッカーは躍進を遂げる。

2006年にも半数以上が2002年と同様のメンバーでワールドカップ本大会に出場を決め、決勝トーナメントにまで進出している。さらにクラブチームレベルでも、Liga de Quito が2008年のクラブワールドカップに出場し、準優勝を遂げるなど、その躍進は著しい。

また、その選手達は、ほぼエクアドル国内で活躍しており、世界的に優れた選手達が多くいるという訳ではない。

このようにここ10年間で目覚ましい発展を遂げたエクアドルサッカーの、転機となった2002年エクアドル代表の情報は、非常に価値があると考えられる。

1.3 チーム作りについて

日本代表監督を務めたフィリップ・トルシエは、「私は自らの哲学を前面に押し出したチーム作りをする。そのチーム作りのコンセプトは練習の内容や指示を通じて、またミーティングや日常生活でのメッセージを通じて理解させる。¹⁷⁾」「チームの枠組みを作るのは監督のコンセプトである。¹⁸⁾」と述べている。また、チーム作りの第一歩として、優秀なス

タッフを集める事が必要で、優秀なスタッフとは単に個人的な能力に秀でているだけではなく、監督の意図を汲み取り、それに忠実に働ける人物の事だ¹⁶⁾と述べている。

また、韓国代表チームのヒディング監督のチーム作りについて言及し、韓国代表チームの朴恒緒コーチは、「日常生活のすべての部分を競技、特にチームワークに結びつけている³⁾」と述べている。プレミアリーグのアーセナルで現在監督をしているアーセン・ベンゲルは、監督に求められるものは「哲学」であり、監督の役割としてはチームにアイデンティティを与える事だ²⁾と述べている。

この事からチーム作りとは、監督の哲学・コンセプトをチームに与えていく作業であり、そのコンセプトは練習の内容や指示、ミーティング、日常生活におけるルール、スタッフや選手選考などの組織体制構築から総合的に伝えていくものであると考えられる。

1.4 関連文献の考証

(1) ワールドカップ関連の研究

本研究の対象となるワールドカップに関するこれまでの研究としては、田中らによるシュートの状況と得点の関係について分析した研究³⁵⁾³⁶⁾や、テレビ放映されたVTRを用いてシステムと戦術を分析したゲーム分析的研究¹⁰⁾¹⁵⁾³⁷⁾が盛んに行われてきた。

しかし、これまでワールドカップに出場するチームのチーム作りに関する研究は見受けられない。

(2) チーム作りに関する研究

サッカーのチーム作りに関する研究として、滝がベンゲル監督のチーム作りに重ねて一貫教育の指導概念の統一を試みる研究³³⁾やジョアン・カルロス監督のチーム作りとその強さを明らかにする研究³⁴⁾を行っている。それらの研究において滝は、それぞれの監督が持つチーム作りの為の「チームコンセプト」とそれを実現させる為の「コレクティブ、ディシプリン」を明らかにし、サッカーの指導者がチーム作りの上で必要な一貫指導教程を構築する事の必要性を述べている。しかし、チームがそのチームコンセプトを持つ為にどのような練習を行ったのか、その

時の指示はどのようなものであったか、またどのようなチームの規律を持ち、どのような組織構成をしていたかについては触れていない。

その他、「チーム作り」という言葉は使用していないが、中西¹²⁾が彼の著書「ベンゲル・ノート」の中でベンゲル監督の名古屋グランパス時代の練習内容や練習中の指示、ミーティング内容、監督のコンセプトについて記述している。しかし日常生活におけるルールも含めた包括的な視点からその「チーム作り」について言及してはいない。

(3) その他の競技におけるチーム作りに関する研究

サッカー以外の競技では、中村¹³⁾による高校バレーボールクラブのチーム作りに関する研究や藤林⁴⁾によるハンドボールのチーム作りに関する研究がある。

中村¹³⁾は、高校の全国大会に出場したバレーボールチームの監督を対象として、チーム作りを「現場で実際に指導されている指導者はレギュラーを決定する場合、どのような条件を必要としているのか、また、チームの運営上影響してくると考えられる、キャプテン・サブキャプテン・マネージャーなどの役員の理想とはどのような条件が理想かなど、実際にどのような方法で役員を決定しているか」という視点から明らかにしている。さらに、今後の課題としてチーム作りに必要な他の条件、家庭環境などについて把握する事で、より充実したチーム作りを行いたいと述べている。

藤林⁴⁾は、全日本ハンドボールチームにおけるオレ・オルソン監督の指導によるトレーニングを分類・考察する事で、トレーニングの構造を明確にし、チーム作りに生かせる資料を得ようとして研究を行った。平成8年3月から6月までにオレ・オルソン監督によって行われたトレーニングやミーティングを筆記・録音・録画の方法によって記録し、その内容をメンタルトレーニング、技術・戦術トレーニング、コンディショニングトレーニングの3つの項目に分け、それらの視点からオレ・オルソン監督によるチーム作りについての考察をしている。

これらの研究において、中村はスタッフや選手選考などの組織体制の視点から、また藤林は練習内容・ミーティングからチーム作りを明らかにしようと試みているが、練習内容から組織体制、日常生活のルールまでを総合的に捉えていない。

ここまでのチーム作りに関する関連文献の考証によって、ワールドカップに出場するチームのチーム作りに関する研究はこれまでない事や、クラブチームやサッカー以外の分野においてチーム作りの研究が行なわれてきたが、それぞれがチーム作りという言葉それぞれの解釈において用いている事が明らかとなった。

1.5 スポーツと文化

スポーツと文化の関係について、オモ¹⁴⁾や杉本³⁰⁾はスポーツと文化は過去において相容れないものであったが、現在は文化の解釈が変化したばかりでなく、スポーツもまた明らかに文化の一部として捉えられるようになったと述べている。

(1) 文化

「文化」について、米山³⁸⁾は後天的に学習され、集団成員によって分有され、世代を通して継承されてゆくような行動様式と価値観であると述べている。G. リューシェン⁵⁾によれば、行動それ自体を意味するものではなく、行動を基礎付けたり、またその結果であるようなパターンや抽象概念を取り扱うと述べ、日常の、或いは科学的な経験から生じる認知的な要素から成り立っていると述べている。Blanchard, K. と Cheska, A. T. は人類学における「文化」の定義として、「一定の期間に一定の人達が有した諸観念、諸習慣、諸技能、諸芸術等など⁷⁾」を挙げている。

これらを勘案すると、「チーム作り」は監督の哲学・コンセプトをチームに与えていく作業である事より、「チーム作り」は文化として捉える事ができ、文化人類学的アプローチによる「チーム作り」の研究も方法の一つとして考えられる。またそのコンセプトは練習の内容や指示、ミーティング、日常生活におけるルール、スタッフや選手選考などの組織体制構築から総合的に伝えられるものなので、逆にそ

れらチーム作りの諸要素から「チーム作り」のコンセプトを明らかにする事ができると考えられる。

(2) スポーツ人類学的視点からの研究

スポーツを文化人類学の視点から捉えようとする研究²⁶⁾としてスポーツ人類学がある。寒川は、スポーツ人類学とは anthropology of sport あるいは sport anthropology の訳語の事であり、この言葉が現われたのは1985年のことで、アメリカの人類学者 Blanchard, K. と Cheska, A. T. が Bergin & Garvey Publishers 社から「The anthropology of sport」と題した著作を出版した事による²⁷⁾と述べている。

岸野は、このスポーツ人類学の学問的位置づけとして、スポーツ人類学はスポーツ科学の一つの専門学であり、そのサブ・ディシプリンであると共に、他方では自然人類学や文化人類学などに関連する領域である。従って一方ではスポーツ科学を、他方では人類学という科学を「親科学」とした専門学である⁹⁾と述べている。

このスポーツ人類学という学問に関し、Blanchard, K. と Cheska, A. T. は著書「The anthropology of sport」の中で、「人間の研究」としての人類学は社会諸科学の一つであり、その内部を自然人類学、考古学、言語学、文化人類学の四つの主要領域に分ける事ができるが、スポーツ人類学はまず第一に行動科学であり、それゆえにより文化人類学と密接に結びついている⁸⁾と述べている。また、「スポーツ人類学は、概念規定の問題に、文化の視点から接近する。この接近は、スポーツ行動はいかなる状況においても文化的に規定されているという仮定に基づいている。⁷⁾」と述べている。

これまでのスポーツ人類学の研究としては、文化人類学からスポーツへの接近であった為に、橋本⁶⁾や熊野¹¹⁾、竹谷³²⁾による民族スポーツを文化の視点から捉えようとするものが多かった。寒川はこのような流れに対し、スポーツ人類学はこれまで近代スポーツを問題にしてこなかったが、重要な研究対象である²⁹⁾と述べており、近代スポーツの現場を文化の視点から明らかにする研究の必要性を示唆している。

1.6 本研究の目的

ここまで記述してきた状況を踏まえ、エクアドルサッカーが躍進する源になった2002年エクアドル代表チームには、調査対象としての価値があり、そのチームのチーム作りを明らかにする事は今後の日本サッカーの発展に大変意義があると考えられる。

そこで本研究においては、チーム作りを文化として捉え、文化人類学的アプローチを用いて、ワールドカップに初出場したエクアドル代表チームの準備キャンプ期間から大会期間における「チーム作り」を明らかにする事を目的とした。

2. 方 法

2.1 調査期間と調査地

調査期間は予備調査期間と本調査期間の二つに区分した。

予備調査期間；2002年3月20日から3月30日まで
本調査期間；2002年5月18日から6月14日まで

(1) 予備調査期間

予備調査期間は、調査対象となるエクアドル代表チームの下見と顔合わせ、さらに最も重要なインフォーマントへの本研究の説明とラポール作りを主な目的とした。

インフォーマントについて佐藤は、彼の著書「フィールドワーク」の中で、「フィールドワークの対象者となる人々をさしている言葉」であり、「資料提供者という訳語があげられるが資料を提供する人というよりは(現場における)友だちの方がふさわしく思えてくる²³⁾」と述べている。また、そのインフォーマントとの「ラポール」(親密な結びつき、信頼関係)を築くことの重要性を述べ、「一步距離をおいた関与」あるいは「客観性を失わないラポール」のスタンスが必要である²⁴⁾と述べている。

3月20日にエクアドルに到着し、本研究の重要なインフォーマントであるエクアドル代表チームジェネラルコーディネーター(以下G.C.とする) Sr. Edmund Luna にエクアドル国内を案内して頂き、エクアドルサッカーの歴史や代表チームの歴史を聞いた。

Sr. Edmund Luna は、エクアドル代表チームの日程調整、エクアドルサッカー協会会長、監督、選手間の調整、選手の所属チームとの連絡、ワールドカップ関連の会議には全て出席するというように、代表チームの総務の仕事を一手にやり、チームにとって大変重要な人物であった。

また監督やコーチと食事を共にして、ワールドカップに向けた親善試合の予定や南米予選におけるエクアドル代表チームの戦いの様子を聞いた。その後、3月21日にエクアドル代表選手達がエクアドルの首都キトに招集され、筆者も監督・コーチ・選手達と同じ場所で食事・宿泊をし、3月23日にニューヨークへエクアドル代表チームと共に出発した。3月27日にニューヨークのジャイアンツスタジアムにてブルガリア代表チームとの国際親善試合(3-0勝利)を終えた後、3月28日にニューヨークからエクアドル代表チームがエクアドルへ帰国するまで同じ場所で食事、宿泊をした。国際親善試合の際にはベンチにも入れてもらう事ができた。そして本大会での再会と研究への理解を約束し帯同を終了した。インフォーマントとは上記の通り良好な関係になり、ラポール作りは成功したと考えられる。

(2) 本調査期間

本調査期間は、エクアドル代表チームが成田空港に到着した5月18日からファーストラウンド敗退後エクアドルへ向けて出発した6月14日まで。本調査期間における調査場所は、次の通りである。

(トレーニング期間)

鳥取：5月18日～6月1日、

6月4日～6月8日

(試合期間)

札幌：6月1日～6月4日

仙台：6月8日～6月10日

横浜：6月10日～6月14日

2.2 調査方法

(1) データの収集方法

本研究においては、1)練習における指示やミーティングから伝えられる監督の哲学・コンセプト、2)練習の内容、3)練習やミーティングにおける技

術・戦術的な指示、4)試合時のフォーメーション、5)日常生活におけるルール、6)スタッフや選手などの組織体制、等「チーム作り」を明らかにする為に必要と考えられる6項目のデータを収集した。

データ収集方法としては参与観察法、面接法等を含むフィールドワークを用いた。

(2) データの記録方法

このフィールドワークによって得られたデータをフィールドノートへの筆記、録画、録音によって記録した。フィールドノートについて、佐藤は著書『フィールドワーク』の中で「調査地で見聞きしたことについてのメモや記録(の集積)²⁵⁾」と述べている。また、R.エマーソンは「フィールドノーツは、調査者が現場にインテンシブかつ密接な形で参加した体験と観察を記述した報告である。²²⁾」と述べている。

2.3 結果の処理

(1) データの記述方法

フィールドワークによって得られたデータの記述方法として、民族スポーツの文化を構造化する「スポーツ文化複合²⁶⁾」概念を用いた。具体的には、フィールドワークによって得られた「チーム作り」に必要なと考えられるデータを、寒川がスポーツ人類学の分野において民族スポーツを「スポーツ文化複合」という概念で文化を構造化する方法を用い、その方法に従って精神文化・技術文化・社会文化の3つのカテゴリーに分け、チーム作りを記述した。

本研究においては、チーム作りの現場を文化として捉え、スポーツ文化複合概念を用いて文化全体を規定するコンセプトを考察し、2002年エクアドル代表チームの「チーム作り」を明らかにするという方法を試みた。

具体的なチーム作りの諸要素の分け方として、チーム作りの現場に必要なと考えられる1)練習やミーティングにおける監督の精神的な指示を精神文化、2)練習の内容、3)練習やミーティングにおける技術・戦術的な指示、4)試合時のフォーメーションを技術文化、5)日常生活におけるルール、6)スタッフや選手などの組織体制を社会文化として類

別し記述した。

3. チーム作りの諸要素

3.1 エクアドル代表チームの社会文化

エクアドル代表チームの準備キャンプ期間及び大会期間中における社会文化に属するものとして、次の2つが挙げられる。

チームのスタッフや選手などの組織体制
日常生活におけるルール

3.1.1 チームの組織体制

チームのスタッフや選手選考などの組織体制構築は、「チーム作りの第一歩¹⁶⁾」であるといわれているが、ここでは本大会に向けた調整期と大会期間中を対象としている為、既に出来上がったスタッフや選手の組織体制を記述する事とする。

(1)代表団メンバー：今回のエクアドル代表団は、チーム本体の50人に加え、大会期間中行動を共にした帯同メディア約25人や、役員や役員の家族25人を含めると総勢約100人の編成であった。

(2)公式エクアドル代表チームメンバー：FIFAから公式に試合会場などに入れるチームメンバーとして認められたのは、FIFAにアクレディテーションカード(以下ADとする)の申請をしたチーム本体の50人であり、内訳は選手23人、監督・コーチ・スタッフ11人、役員16人であった。

選手の家族達は日本で帯同する事が許されず、帯同メディアや役員、役員の家族も移動時のチャーター機には一緒に乗り同じ宿泊先に滞在はするが、選手からはADコントロールによってできるだけ隔離されていた。

(3)練習時における組織体制：練習を行うに当たり、Hernan Gomez監督は「スタッフもチーム一丸となって戦う」という考えから、基本的にグラウンドにスタッフ全員が集まるようにしていた。また、Hernan Gomez監督は、「スタッフを信じており、私は全部を見る事はしない。」と述べており、分業が確立されていた。

練習は、基本的にフィジカル的な部分をフィジカルコーチである Sr. Elkin Sanchez が、そして技

術・戦術的な部分を監督である Sr. Hernan Gomez が中心となって行った。Sr. Elkin が練習を行っている間、監督はほとんど選手に指示を出す事はなく、監督や副監督は役員たちに混ざってミニゲームを楽しんだり、インタビューを受けるなどしていた。逆に監督が技術・戦術的な練習を行っている間、Sr. Elkin は全く指示を出すことはなかった。

Hernan Gomez 監督の弟である副監督の Sr. Gabriel Gomez は、基本的にエクアドル代表チームが何度も行っていた DF4 人、MF2 人の計 6 人での『ラインディフェンス』練習を行っている際に、たまに 2 人の MF の選手にポジションのとりかたについての技術・戦術的な指示をするくらいで、ほとんど見ているだけという状態であった。

2 人の医者は常にグラウンド横に待機し、何かあった場合はすぐに Dr. Maldonado が出て行き、処置を行っていた。もう一人の医師は氷の用意や Dr. Maldonado が処置中に他の選手が怪我をした場合に動いていた。本大会中に、Sr. Alex Aguinaga が大内転筋を傷めたが、その際 Hernan Gomez 監督は医師の確認をとって次の試合に出場させてもよいか判断をしていた。

また練習中は、会長を除いたその他の役員やその家族は、グラウンドに入る事は許されなかった。

3.1.2 チームにおける社会的ルール

(1)就寝：試合がある日や移動日等の特別な日を除いて、就寝は22時半と決められ、22時半には部屋にいる事が義務付けられた。マッサージで遅くなる選手はいたが、基本的にはプロらしく規則を守っていた。

(2)食事時間：それぞれの食事の時間は、朝食は基本的に 8:00-11:00 の間で選手達は自由にレストランに行き食事をした。その後も移動日や試合日などを除いて、昼食は 12:30 からまた夕食は 19:30 から全員揃って始められた。

(3)レストランにおけるルール：基本的に食事中に同じレストラン内に入る事が許可されたのは、エクアドル代表チームからは、大会時に AD カードを持つ選手 23 名・スタッフ 11 名・役員等 16 名の計 50 名、

大会運営側からはチームリエゾン6名と自治体のキャンプ委員会メンバーであった。チーム側からは、国内外のメディアやADを持たない役員がレストランに入るのを厳しく取り締まって欲しいとの依頼があり、地元ボランティアに依頼し、レストラン入りをADでコントロールした。Hernan Gomez 監督は、メディアや役員が必要以上に選手や監督自身に近づくの極力避けるよう考えていた。その理由として、ゴメス監督は①選手に役員達の観光ムードが伝わってしまい集中できなくなるから②できるだけ選手達にプレッシャーを与えないため、と筆者とのインタビューの中で述べている。

(4)メディア対応：事前キャンプが行なわれた鳥取においては、メディア対応はAD所有のチーム関係者が入れる区画外にある一室が決められ、そこで毎日インタビューが行われていた。インタビューはエクアドルに衛星で飛ばされ、ライブ中継されていた。

(5)服装：食事時の服装から移動時の服装、練習着までが細かく決められており、予定表に書かれた指示に従って、選手とコーチ陣は服装を揃えていた。

(6)集合時間：練習や試合に出発する為のバスの集合時間はほとんどの選手が守れており、特に問題はなかった。

(7)部屋割り：部屋割りは、その宿泊ホテル・施設に到着する前にバスの中でG.C.のSr. Edmundo Lunaより発表される。選手の部屋は、試合開催地のホテルでは基本的に2人部屋としていた。ただし、最高齢であるAlex Aguinagaはツインの部屋を1人で使用していた。また、キャンプ地においては1ロジ毎にツインが3部屋あり、そのツインの1部屋を1人で使用していた。基本的に部屋のメンバーは固定されていた。部屋割りは、年齢が近いもの、出身クラブによって分けられていた。

(8)言葉使い：監督はグラウンド内においては、選手の名前を呼ぶ時は敬語を用い、それ以外では友達のように話し掛けていた。また、選手達は監督に対し、ずっと敬語を用いていた。監督に何故グラウンド内だけ敬語を用いるのかと質問したところ、「グラウンドの中では対等だからだ。」との返答があった。

3.2 エクアドル代表の精神文化

エクアドル代表チームの準備キャンプ期間及び大会期間中における「精神文化」、つまり「全体(あるいは部分)を基礎づける価値観」は社会文化や技術文化から総合的に理解されるものであると考えられる。しかし、「チーム作りを基礎づける価値観」は、監督がミーティングや練習において伝えられる精神的な「言葉」からも読み取る事が可能であると考えられる。

ミーティングや練習における精神的な指示としてよく用いられる言葉として、次の2つが挙げられる。

Si! Se Puede!

Solidaridad

3.2.1 Si! Se Puede!

「Si! Se Puede!」とは、英語で言えば「Yes, We can!」の事であり、「我々はできるんだ!」という意味である。G.C.のSr. Edmundo Lunaによれば、エクアドル代表チームが南米予選を戦っている時に、毎回ワールドカップ南米予選で低迷しているチームの「メンタルを変える為に、就任当初から監督が言ってきた言葉」との事である。

雑誌「SOCCERZ」の情報によれば、この「Si! Se Puede!」という言葉は、もともとHernan Gomez監督が選手や協会を鼓舞する為に使っていたが、南米予選でブラジルに勝利した後から、代表チームのスローガンにまでなり、エクアドル国内ではこの言葉を口にするのが、経済危機に喘ぐ国内の状況を加味し社会現象とまでなっていたとの報告がある³⁹⁾。

「これまで一度も南米予選を勝ち上がった事のないチームを変えるのは、まずメンタルであった。」とHernan Gomez監督は筆者に述べており、この「Si! Se Puede」はチームのメンタルな部分を変えるのにとっても重要な意味を持っていたと言える。

また、ベンゲル監督は、「就任当初勝った経験の少なかった名古屋グランパスに勝利のエスプリを植え付けるのは大変な作業だった。私は、まず、グランパスが他のチームより劣っているわけではない事を説得する事から始めなければならなかった。ただ

し、本人がその言葉を信じようとしなければ効果はない。¹⁾」と述べており、「Si! Se Puede!」は南米予選で勝ちあがるとともに選手全員がその言葉を信じるようになり、ただの掛け声ではないチーム全体の重要な価値観を形成する言葉となったと言える。

準備キャンプ期間や大会期間中のミーティングにおいてもこの「Si! Se Puede!」を Hernan Gomez 監督は何度も口にしており、それとともに「チャレンジ精神」と「諦めない気持ち」を持つ事の重要性を何度も強調していた。

Hernan Gomez 監督は選手を集めたミーティングやメディアとのインタビューや記者会見において常に「エクアドルは現在の実力はこれまでの歴史や結果から客観的にみると予選リーグ最下位が妥当である。イタリアは世界のトップレベルの国であり、クロアチアは前回大会で3位になっている強豪である。メキシコは予選で苦戦してきたとはいえ、ワールドカップ12回出場の実績がある。エクアドルは初出場であり、予選で2位という良い結果を残したからといって過剰な期待をしてはいけない。今回は初出場らしくワールドカップで学んで帰るのだ。」と述べていたが、この発言は、自チームの戦力をきちんと把握した上で、選手達が誤って受け身になる事を避け、「チャレンジ精神」や「諦めない気持ち」というチームの価値観、コンセプトをさらに認識させるものであった。

3.2.2 Solidaridad

「Si! Se Puede!」の他にミーティングにおいてよく用いられていた言葉として「Solidaridad」がある。Hernan Gomez 監督は「Solidaridad(結束)すれば、勝つ可能性はある。」と何度も述べており、また「ワールドカップでは実力通りに力を出し結果を伴うのはとても難しいが、Solidaridadによって我々にも勝つ可能性はある。」と述べていた。この「Solidaridad(結束)」は、「Si! Se Puede!」とともに何度も Hernan Gomez 監督が好んで口にした言葉であり、常に「チームの為に戦う事(チームワーク)」を求めた。

以上の「Si! Se Puede!」「Solidaridad」という言

葉を監督はミーティング以外でも練習中の指示においてよく用いていた。ミーティングにおける発言、そして後に記述する練習中の指示や社会的ルールから総合的に鑑みると、この二つの言葉が監督のコンセプトを伝える重要なものとなっていたと考えられる。そしてチームは、以上二つの言葉から「チャレンジ精神」と「諦めない気持ち」、「チームワーク」という監督のコンセプトを共有し、エクアドル代表チームの精神文化として、チームが共有する価値観となっていたと考えられる。

3.3 エクアドル代表チームの技術文化

エクアドル代表チームの準備キャンプ期間及び大会期間中における技術文化として次の3つが挙げられる。

練習の内容

練習やミーティングにおける技術・戦術的な指示

試合時のフォーメーション

3.3.1 練習の内容

チーム作りをする上で、もっとも効果の現れやすいものであり、監督のチーム作りのコンセプトが詰まっているのが、この練習の内容であると考えられる。まず練習がどのようにして決められていたかを述べた上で、準備キャンプ期間中と大会期間中における練習の内容を記述する。

(1)練習計画：医師によれば、「トレーニングメニューはすでにエクアドル滞在中に監督・フィジカルコーチ・トレーナー・医者の中で決められて」おり、日本では改めて練習内容に関し、コーチ陣を集めて会議を行う事はなかった。さらに「今年(2002年)1月から3月にかけて負荷を上げており、日本に来てからは、基本的に時差に慣れる事とリーグ戦の疲労回復、体力維持が主目的だ。」との事であった。

(2)練習内容：練習は、藤林⁴⁾によれば、大きく1)メンタルトレーニング、2)技術・戦術トレーニング、3)コンディショントレーニングの3つに分類される。エクアドル代表チームは特にメンタルトレーニングとして時間をとっておらず、またメンタ

ルトレーニング専門のコーチもいなかった事から、本研究においては1) コンディション(フィジカル) トレーニング, 2) 技術・戦術トレーニングについて記述する事とした。

1) コンディション(フィジカル) トレーニング
フィジカルコーチの Sr. Elkin がすべて行う。Sr. Elkin によれば「私が行うフィジカルトレーニングは、基本的にボールを用いて行う。」との事であり、事実その言葉通り、最初軽くランニングをし、ストレッチを行った後は全員がボールに多く触れるようなメニューが組まれていた。

2) 技術・戦術トレーニング

数種類の技術・戦術トレーニングを行う訳ではなく、何度も同じ練習を繰り返し、またその練習方法は基本的に変更せずに少しずつ実戦に近づけた状況で段階的に練習を行っていた。特に何度も行っていたのは、4人のDFのサイドにボールが出た場合のアプローチの仕方や、それに2人のMFの選手が加わり、その際のディフェンスラインの確認と中盤選手の対応を何度も確認するというものであった。

これはエクアドル代表の命綱とも言えるものであり、監督がミーティングや練習中によく話していた「個々の能力では勝てないが、チーム一体となって挑めば十分に戦う事ができる。」という言葉を具体的な戦術として現わしたものであった。

攻撃に関する練習は、あまり練習中に全員で行われる事はなかったが、上記のディフェンスラインの確認とボールへのアプローチの練習後にごくたまに相手をつけて、11対11の試合形式の練習で次の通りに行われていた。

「サイドチェンジからの速攻」を常に意識させ、サイドのMFの選手が一度同サイドバックの選手にボールを下げた場合、一回のロングパスで逆サイドまでボールを蹴るサイドチェンジのパス練習を何度も繰り返し行っていた。

サイドチェンジのパスが通った後は、必ず早く攻めるという約束事を何度も強調し、突破力のある右サイドの Sr. Ulisez De La Cruz にボールが渡った場合は、ドリブルや中盤の選手とのワンツールのパスで

攻めあがり、センターリングを上げる。またキック力のある左サイドの Sr. Raul Guerron にボールが渡った場合は、トップの選手がすばやく動き出しそこに当てるという練習を行っていた。

3.3.2 練習やミーティングにおける技術・戦術的な指示

Hernan Gomez 監督は、ミーティングや親善試合中における技術・戦術的指示として、「チーム一体となってブロックを形成しろ」「チームのバランスを整えろ」「全体がもっと狭くなれ」の3つのポイントを主に注意していた。また、最も練習時間を費やしていたディフェンスの技術・戦術練習では、グラウンドで次の4点について主に注意をしていた。

- (1) サイドにボールが出た際と同サイドバックのアプローチ
- (2) 上記(1)の時点での残り3人のディフェンス選手のポジション
- (3) どのタイミングでラインを崩すか
- (4) 相手の中盤がボールを下げた場合のラインコントロール

- (1) サイドにボールが出た際と同サイドバックのアプローチ

ボールが相手MFのサイドの選手に渡った場合、必ず最初に同サイドバックが残り3人のディフェンスラインより少し前に出てアプローチをかける。その際に、「あまり前に引張られ過ぎるな」という注意を Hernan Gomez 監督はよくしていた。これはあくまでも「4人のディフェンスがいつも一体となってディフェンスをする」という事が大前提になっている為である。

- (2) 上記(1)の状況での残り3人のディフェンス選手のポジション

上記(1)の状況でサイドバックがアプローチをかけた場合、残りの3人のディフェンスはサイドバックの選手を頭として「バナナのような形」となってラインを形成するようにとの指示が監督から出されていた。アプローチをかけたサイドバックの選手がサイドで少し前にポジションを取ると、残りの3選手は少し後ろの位置にポジションを取り、横一直線の

ラインを形成する。この際、4人の選手の横幅の間隔はほぼ一定になるようにポジションを取るようとの指示も出されていた。また、一番逆サイドに位置するディフェンスの選手は、ピッチの真ん中にポジションを取る事が要求されていた。

(3) どのタイミングでラインを崩すか

Hernan Gomez 監督の練習中に掲げる指示を纏めると次の通りである。基本的には相手がボールを所持している場合、ボールから約30メートルの位置にラインを作る。しかし、相手が前を向いてボールをどこにでも蹴れる所謂プレッシャーがかかっていない状態で相手のフォワードの選手または中盤の選手がラインの後ろにできたスペースに入り込もうとした場合は、ライン全体を下げる事で対応する。ちなみに日本代表はこのような場合、「3m コンセプト」と称し、便宜的に「3m」ラインを下げると決めていた³¹⁾。

しかし、自陣ゴールが近くなりゴールエリアの前にラインを作った場合は、その背後にできたスペースに入り込もうとする選手に対し、そのマークについた選手がラインを崩してきっちりと最後までマークをした。

(4) 相手の中盤がボールを下げた場合のラインコントロール

相手の中盤がボールをディフェンスに下げた場合、それに応じてラインを上げるよう指示をしていた。基本的な目安はボールから約30メートルの位置であった。ラインのコントロールは Sr. Ivan Hurtado 選手を中心に行っていた。

3.3.3 試合時のフォーメーション

フォーメーションは、相手によって変更する場合やしない場合があり、そこにはチームの戦い方の考え方が表われると考えられる。本調査期間中においてエクアドル代表チームは日本滞在中、親善試合2試合、ファーストラウンド3試合の計5試合を行った。それぞれの試合におけるフォーメーションは下記の通りであった。

(1) 5月23日 対セネガル

1-4-2-3-1

(2) 5月27日 対京都パープルサンガ

1-4-2-3-1

(3) 6月3日 対イタリア

1-4-2-3-1

(4) 6月8日 対メキシコ

1-4-4-2

(5) 6月13日 対クロアチア

1-4-4-2

3.3.4 フォーメーションの変化

記述の通り、親善試合からイタリア戦にかけては1-4-2-3-1で、その後2試合を1-4-4-2にて試合に臨んでいる。しかし実際には、1-4-2-3-1のMFを形成する2-3の部分は4-1のような形となっており、1-4-4-1-1とも言える布陣となっていた。つまり、FWが縦に並んだのが1-4-2-3-1であり、横に並んだのが1-4-4-2の形と言え、FW以外のポジションには変わりはないと言える。

Hernan Gomez 監督は、精神文化の節にて述べてきた通り「チャレンジ精神」「諦めない気持ち」「チームの為に戦う(チームワーク)」をコンセプトとして前面に押し出したチーム作りを行っている。その中で、「結束(組織力)があれば試合に勝つ事が可能である。」と述べており、この結束(組織力)を具体的に戦術で表し、何度も試合前の練習でチーム一丸となって繰り返し行なわれるディフェンスの練習はこのチームの命綱とも言える。そこで、イタリアとの試合前のミーティングにて Hernan Gomez 監督が「イタリア代表のエースピエリ選手は世界屈指のストライカーであるが、特定のマークは付けない」と話した通り、個人対個人ではないチームとして戦う(結束)というコンセプトを貫き通し、大会中の3試合のようなフォーメーションとなったと考えられる。

3.4 文化諸要素間の関連性

ここまで本研究において、エクアドル代表チームにおけるワールドカップ大会に向けた準備キャンプ期間から大会期間中の「チーム作り」を文化として捉え、「スポーツ文化複合」という概念を用いて社会文化・精神文化・技術文化の3つに分類し構造化

してそれを記述してきた。

この中で、エクアドル代表チームの「チーム作り」を規定する文化要素について、それぞれ3つの文化要素間の関連を明らかにする事によって、チーム作り全体の文化を規定するコンセプトについて考察をしたい。

3.4.1. 全体を基礎づける精神文化の諸観と社会文化の関連

エクアドル代表チームの組織体制は、スタッフ一人一人の役割が明確になっている事、また会長が最終的な判断をするのだが基本的には監督が考えた通りにチームが運営されている事から、監督のコンセプトの下「チーム一丸となって戦う」という考えの基に構成されていたと言える。また、日常生活のルールに関して、服装の統一や食事時間等チーム一体となり行動する事が義務づけられ、逆にチーム関係者以外は選手にあまり近づけないようチームとそれ以外がはっきり区別されていた。これは、「チームワーク、結束」をさらに強調するものであったと考えられる。また、エクアドル代表チームの精神文化として「Solidaridad(結束)」するという事がチーム内の重要な価値観であったが、社会文化において強調された「チーム一丸となって戦う」「チームワーク」はその精神文化の価値観を組織体制や日常生活のルールとして目に見える形で表現していると言える。

3.4.2. 全体を基礎づける精神文化の諸観念と技術文化の関連

エクアドル代表チームの戦術・技術的な練習において Hernan Gomez 監督は、選手達が一体に動く事を常に求めていた。また、そのチームの戦術・技術的なコンセプトが表われるフォーメーションにおいても、「チームが一丸となって戦う」というコンセプトにより、相手がどこであってもまた主力選手が負傷してもフォーメーションを変更する事はせず、組織として戦う事を求めた。これは、個人ではなく組織として「Solidaridad(結束)」すれば勝つ可能性があるという精神文化における価値観を技術文化におけるフォーメーションという形で表現した

ものと言える。

3.4.3 チーム作り文化を規定しているコンセプト

以上を勘案すると、エクアドル代表チームのチーム作りの文化を規定する諸観念、コンセプトとして「Solidaridad」という言葉が全体のキーワードとなっていると考えられる。

ヒディングは、「私がこの地位に上がったのは、チームワークの為の厳しい規則を自ら守ってきたから可能であった²¹⁾。」と語り、チームワークを最優先していた。韓国代表チームの選手である洪明甫は「ヒディング監督の新しい指導方式に初めて接した時、文化的な衝撃を受けた。彼は組織の一体感を非常に重視する。例えば、練習の時も今日は青色の半袖シャツを着ると決定すれば、全員その服装で午前中を送らねばならない。もちろん監督も全く同じ服装であり、協会の人も同じ服装である。食事にも皆同じ服装で行かねばならない²⁰⁾。」と述べ、やはりヒディング監督のチーム作りにおいても「チームワーク」「結束」が全体のコンセプトになっていたと考えられる。

日本代表チームのトルシエ元監督は、「私のコンセプトはいわゆるフラット3をベースにした組織的なサッカーだ。¹⁹⁾」「今日のサッカーの60%がチームプレーである。¹⁹⁾」と述べており、チームプレーの重要性を指摘している。

以上より、2002年ワールドカップ大会において結果を残した多くのチームが「チームワーク、結束」をコンセプトにしたチーム作りが行われたと考えられ、エクアドル代表もそのコンセプトを基にして、強いチーム作りが行われたと考えられる。

また、チーム作りにおいては、全体を統括するコンセプトに対し、それが技術文化や社会文化とも整合性を持っている事が重要であると考えられる。

4. 総 括

本研究では、記述の通りエクアドル代表チームのワールドカップ大会に向けた準備キャンプ期間から大会期間におけるチーム作りをスポーツ文化複合概

念を用いた文化人類学的アプローチから明らかにする事を目的としてきた。

そして、これまで述べてきたように、エクアドル代表チームのチーム作りにおける諸文化を、社会文化として規律正しい社会的ルールやチーム組織編成、技術文化として Hernan Gomez 監督のラインディフェンスの戦術練習やフォーメーション、そして精神文化としてチャレンジ精神や諦めない気持ちなど大きく3つのカテゴリーに類別した。

また、その構造化された種々の文化要素から、エクアドル代表チームのチーム作り全体を規定するキーワード「Solidaridad (結束)」が浮かび上がり、これがチーム作りのコンセプトである事が明らかになった。

また、この「Solidaridad」をコンセプトにした「チーム作り」が、文化諸要素間で整合性をもっていたことが、エクアドル代表チームの躍進を支えてきたと示唆された。

そしてエクアドルサッカーは、2006年ワールドカップにおいても、組織的な戦いで南米予選を通過し、本大会においても、決勝トーナメント進出を果たした。また、2010年ワールドカップの南米予選も、本大会出場に向け、可能性のある順位につけている。この躍進を支えているのは、2002年大会に身につけた「Solidaridad (結束)」文化による、組織的なサッカーがベースとなっている、と考えることができる。

用語の規定と研究の範囲

「チーム作り」という言葉に対し、その意味や範囲について言及した先行文献は見当たらない。

滝³³⁾はベンゲル監督の「チーム作り」を、1シーズンにおける練習方法や練習時におけるベンゲル監督の指示から明らかにしようと試みているが、「チーム作り」という言葉が具体的にどのような活動を指し、どのような意味を持つのかについて言及はしていない。

そこで、本研究においては、元日本代表チームトルシエ監督や元韓国代表チームヒディング監督、そ

して元グランパスエイト監督で現アーセナルのベンゲル監督の発言からチーム作りに必要な諸要素を引用した。その上で「チーム作り」をチーム活動の場における諸文化活動として規定し、筆者が帯同した期間におけるエクアドル代表チームの諸活動を「チーム作り」文化として捉える事とした。

また「チーム作り」文化がチーム活動の場として、チームとしての文化を明らかにするものであるから、本研究では個人的な活動については言及しない事とした。

研究の限界

本研究のフィールドワークによるデータは、エクアドル代表チームによる「チーム作り」の文化活動のうち、ワールドカップ大会に向けた準備キャンプ期間から大会期間中までの文化活動のデータ収集に限られている。Hernan Gomez 監督のエクアドル代表チーム就任から、ワールドカップ大会ファーストラウンド敗退までの期間に渡って、帯同しフィールドワークを行えば、チーム組織体制構築や練習内容のさらに詳細なデータを得られる事は間違いなく、本研究の限界として言及しておく必要がある。

しかし、本研究においては例え短期間ではあっても、その期間における文化活動であるという事を明言し、範囲を規定する事で研究をおこなった。

また、練習内容やミーティングに関するデータは、そのほとんどに参加しデータを収集したが、チームリエゾンオフィサーとしての役割上、その仕事を遂行する為にすべてのデータを収集するには限界があった。

謝 辞

本研究に協力して頂きこのような貴重な機会を与えて頂いた Sr. Edmundo Luna, Hernan Gomez 監督と、最後まで変わらぬ友情で接してくれたエクアドル代表チームの皆様へ心から感謝の意を表したいと思います。

5. 文 献

- 1) アーセン・ベンゲル(1997)勝者のエスプリ. 東京, 日本放送出版協会, 20.
- 2) アーセン・ベンゲル(1997)勝者のエスプリ. 東京, 日本放送出版協会, 77-81.
- 3) チェ・ヨンギョン(2002)ヒディングのリーダー力. 東京, PHP 研究所, 112.
- 4) 藤林文博(1997)オレ・オルソン監督によるハンドボールのチーム作りに関する研究. スポーツ運動学研究10, 87-93.
- 5) G. リューシェン(1988)スポーツと文化の相互依存. John W. Loy, Jr., Gerald S. Kenyon, Barry D. Mc Pherson 編(糸野豊訳), スポーツと文化・社会, 第1版, 東京, 株式会社ベースボールマガジン社, 441.
- 6) 橋本和也(2001)スポーツにおける語りと土着性—近代スポーツの土着化—, スポーツ人類学研究, 3, 1-17.
- 7) Kendall Blanchard, Alyce Taylor Cheska(大林太良監訳, 寒川恒夫訳)(1988)スポーツ人類学入門. 東京, 株式会社大修館書店, 34.
- 8) Kendall Blanchard, Alyce Taylor Cheska(大林太良監訳, 寒川恒夫訳)(1988)スポーツ人類学入門. 東京, 株式会社大修館書店, 195.
- 9) 岸野雄三(2000)総説 人類学とスポーツ—スポーツ人類学とは何か—, スポーツ人類学研究, 2, 1-27.
- 10) 越山賢一, 吉村雅文, 古賀初, 柴田和千代: ブラジルの戦術分析—1994ワールドカップサッカーアメリカ大会—, 北海道教育大学紀要(第2部C), 48(2), 2, 183-194, (1998)
- 11) 熊野建(1999)イフガオ族のドパップ相撲—ルソン島北部における儀礼的遊びと競争—, スポーツ人類学研究, 1, 1-23.
- 12) 中西哲生, 戸塚啓(2002)ベンゲルノート. 東京, 株式会社幻冬社
- 13) 中村寿博(1986)高校バレーボールクラブのチーム作りに関する一考察. 中京女子大学紀要, 20, 111-118.
- 14) Ommo Grupe(永島惇正・岡出美則・市場俊之共訳)(1997)文化としてのスポーツ. 東京, ベースボールマガジン社, 30-41.
- 15) 大橋二郎, 金子保敏, 沼澤秀雄, 川端理香, 武田恒樹(1999)ワールドカップ・フランス'98日本代表チームのボールキープタイムおよび移動距離. 第19回サッカー医・科学研究会報告書, 9-13.
- 16) フィリップ・トルシエ, 田村修一(2001)トルシエ革命. 東京, 株式会社新潮社, 23.
- 17) フィリップ・トルシエ, 田村修一(2001)トルシエ革命. 東京, 株式会社新潮社, 39.
- 18) フィリップ・トルシエ, 田村修一(2001)トルシエ革命. 東京, 株式会社新潮社, 48.
- 19) フィリップ・トルシエ, 田村修一(2001)トルシエ革命. 東京, 株式会社新潮社, 49.
- 20) 李東炫, 金華盛(青柳純一訳)(2002)ヒディング革命. 東京, ダイヤモンド社, 223-224.
- 21) 李東炫, 金華盛(青柳純一訳)(2002)ヒディング革命. 東京, ダイヤモンド社, 225-226.
- 22) R. M. エマーソン, R. I. フレッツ, L. L. ショウ(佐藤郁也, 好井裕明, 山田富秋訳)(1998)方法としてのフィールドノート. 東京, 新曜社, 30.
- 23) 佐藤郁也(1992)フィールドワーク. 東京, 新曜社, 140.
- 24) 佐藤郁也(1992)フィールドワーク. 東京, 新曜社, 144-145.
- 25) 佐藤郁也(1992)フィールドワーク. 東京, 新曜社, 180.
- 26) 寒川恒夫(1984)スポーツ理解に対するスポーツ人類学の寄与—文化としてスポーツをみるとは—, 体育の科学, 51-1, 44-47.
- 27) 寒川恒夫(1990)スポーツ人類学アンソロジー—1—スポーツ人類学の研究史, 体育の科学, 40-4, 299-303.
- 28) 寒川恒夫(1991)スポーツ人類学アンソロジー—11—スポーツ文化複合, 体育の科学, 41-2, 139-145.
- 29) 寒川恒夫(1994)スポーツ文化論. 東京, 株式会社杏林書院, 1-3.
- 30) 杉本厚夫(1995)スポーツ文化の変容—多様化と画一化の文化秩序—. 京都, 世界思想社, 10-18.
- 31) 田嶋幸三(2002)P. トルシエのチームづくり. 財)日本サッカー協会技術委員会監修, JFA テクニカルレポート. 東京, 財団法人日本サッカー協会, 58.
- 32) 竹谷和之(1999)バス民族スポーツのフィールドワーク, 体育学研究, 44, 294-298.
- 33) 滝弘之(1996)サッカー指導者のためのチーム作りの一貫指導教程の指導概念の統一に関する一考察—グランパス, ベンゲル監督のチーム作り重ねて—, 中京大学体育学論叢, 38-1, 67-78.
- 34) 滝弘之(2002)サッカー指導者のためのチーム作りの一貫指導教程の構築に関する一考察—鹿島アントラーズ, ジョアン・カルロス監督のチーム作り—. 中京大学体育学論叢, 43-2, 19-25.
- 35) 田中和久, 戸薊晴彦(1991)ワールドカップサッカー

のゲーム分析(その1)―シュートの状況と得点―.
北海道教育大学紀要(第2部C), 第42巻, 第1号,
79-88.

- 36) 田中和久, 増田啓, 戸苅晴彦(1991)ワールドカ
ップサッカーにおける「得点の奪い方」考―ITALIA'90
ベスト4―. 第11回サッカー医・科学研究会報告書,
1-6.
- 37) 山中邦夫, 森岡理右, 松本光弘, 萩原武久, 増田和
美(1993)サッカーワールドカップ・コンピューター
による記述分析―試合中のチームのボール保持につい
て―. 第13回サッカー医・科学研究会報告書, 15-20.

- 38) 米山俊直(1991)文化人類学を学ぶということ. 谷
泰編, 文化人類学を学ぶ人のために, 京都, 世界思想
社, 7.

別記

- 39) 雑誌 SOCCERZ (2002) 前略, 赤道直下の国より.
SOCCERZ 3月号, 41-45, 東京, 株式会社フロムワ
ン.

(平成21年9月30日 受付)
(平成22年2月19日 受理)